紫雲寺

―集団疎開日記帳から―

木下　務
江古田二丁目

私の集団疎開時の日記帳をやっと探し出したのが母の死んだ年の一九八〇年。二冊とも表紙はボロボロだがなかの字はたしかに自分のもの。

当時私は江古田小学校六年、十一、二歳で体重二八・二キロ（一九四四年十二月十三日の記録）の少年。

私たち男子の疎開先は、福島県田村郡三春町。私の宿舎は紫雲寺。

今年四月、同期生との旅行でその地を再訪する機会ができた。旅程の関係で、私とT氏は早朝五時起きで「紫雲寺」付近を歩きまわった。東北の春はまだ早く、空気は少々冷たかった。明るく朝日がさし始めていた。家並のたたずまいは清潔だった。

三春大神宮～紫雲寺～三春小学校～三春城址へと七時半の朝食に間に合うように、むさぼるように見てきた。

今回再び日記帳を読み直して、次の四つにまとめて集団疎開の体験を書き記すことにした。

一、食事・おやつ

集団疎開の生活で後年、最も強く刻み込まれて思い出されることは、食べ物のことであり、空腹の思いをしたことである。

日記を見ても毎日の三度三度の食事の内容が、まるで献立を書きとめたようにこまかく記録されている。

かつて中国を訪問したとき、私たちの団の記録を交代でとった日誌には、毎回の食事の内容が書き記されたが、それは中国料理が珍しく、おいしかったからだと思うが、疎開時の日記に出てくることは、毎日、毎日の空腹の思いがそこに関心を向けさせていたと考えざるを得ない。何とも「飽食」の時代からするとみじめっぽい記述でやりきれない思いがする。

おやつは十時と三時にあった。日記をみると、柿、栗、梨、りんご、いちじく、みかんといったくだものが多かった。他にさつまいも、かぼちゃ、ぎんなん（火鉢で焼いて食べた）、コブ、いり大豆、枝豆などである。

みかんは皮までコタツで焼いて食べたし、外出時に薬局にい

って「レミー」とか「ミクローゼ」という名称の胃腸薬（？）を買って、お菓子代りにしていたようである。

また、友達の「食べ物がなくなった」という記録も出ている。

食の他の日常生活では、シラミに悩まされたこと。冬のトイレは、周りがこぼした小便でいつも凍りついていたこと。風呂には割合によく行っていたこと、などが思い出される。また、ふとん干しというと、寺の庭の正面の囲いのある大きな墓のまわりに干したのだが、そこが、福島の生んだ自由民権家、河野広中の髪塚碑であったことは後年に自覚したことである。

二、勉強と作業

当時、私たち疎開学童は、午後に現地の三春小学校の教室を使って三時間の授業をした（十二月に入っての一時期だけ六年生だけが午前中通ったことが記録されている）。だから、午前中は、担任の先生がいる宿舎にそのクラスの者がそれぞれの宿舎から集まってきて勉強したのである。また、自習勉強も各自でしていた。その他、午前中または学校の行き帰りに作業をしている。特に六年生は、一番身体も大きく力もあったわけで、野菜や柿など物資の運搬、まきをとってくるとか、フトン干し場を作るとか、コタツの中の土壁を運ぶとかさまざまな労働を、先生や寮母さんと一緒にやって寮の集団生活を支えていたといえる。

三、たのしみ

寮生活での三年生から六年生の子どもたちだけの生活のなかで、どんなたのしみがあったのだろうかと思う。二泊三日の修学旅行や林間学校とはちがう長期間のいつ終わるかもわからない集団生活だったのだから。

日記で見ると、「肉弾戦」をしたり、墓場の山の方でチャンバラをしたり、雪が降れば朝から雪合戦をしたり、部屋の中でのトランプ、コタツに入っての話などが書いてある。また、集団的なたのしみとしては、夕食後にときどき音楽会（学芸会）のようなものが行われている。軍歌を歌ったり、芸達者な友達のおどりがあったり、方丈さんや友だちの紙芝居（「軍用犬の手がら」「おしゃかさまと鳩」「英霊に応ふ」「大国主命と白兎」「北満の志士」など）が行われている。

しかし、何とも言えないのは、会のおわりに「海ゆかば」を歌っている記録である。私の記憶からは消え落ちているのだが、こんな悲壮な歌を全員で歌って寝るのである。これが戦時下の少国民の日常だったのである。

また、映画も町の映画館で見ている。（「マー坊の鉄血陸船隊」「桃太郎の海鷲」「開戦の前夜」「男の花道」「あなたは狙われている」など）

そういうなかで、後年の記憶に残る唯一の楽しい想い出はスキー遊びである。最初は、竹スキーを作ることを習い（一月三

日)、割った竹の先を火であぶって曲げて作る。その長さは三〇センチ位だったろうか。その小さなスキーを持って、寺の裏山の小道で、また、三春大神宮の参道で滑ったのである。急斜面の角を曲がりそこねてがけから落ちたりして、いつしか滑り下りることができるようになった楽しみは、遊びたい盛りの子どもたちにとってこんな楽しいことはなかったのである。

四、ひとの情愛

親元を離れた「単身赴任」の子どもたちにとって、ひとの情愛をかみしめる気持ちは、どこかになくてはならないものであったろう。食に満たされなければなおさら、そこに情愛があることが生きる支えであったはずだ。

その意味で、共に暮らした友達との情、先生や寮母さん、和尚さんとの情が私たちをいつまでも、時代の憎しみを超えて結びつける。

日記を読むと、私も案外と親や兄姉、親戚に手紙を書いている。他に、以外にも近所の人にまで(といっては失礼だが、当時の近隣では家族中のつきあいがあっだのだろう)。それから、転校前の学友の疎開先(行き先を前校に問い合わせて)にも葉書を書いている。そういうやりとりの中でどれだけ心の支えを得たことか。

しかし、何といっても親の面会ほど楽しみにしていたものはなかった。そこでは情愛の実感を確かめただけではなく、飢えを満たすこともできたからだ。親は、東京も物資が不足していたであろうが、寮では食べられない食物を持参してきたからである。

日記によると(十一月十二日~十四日)、母が面会に来て持ってきてくれたおはぎを食べ過ぎたのか、その夜便所に七回もいったことが記され、医者に行ったり、治らなければ許可を得て帰るかといった心配をかけている。

そして、親たちは我が子にだけでなく、近所の友達にも、ときには全員に渡るように食料を持ってきてくれた。私たちはたくさんの友達の親からおいしいものを分けてもらった。

もう一つ、他人の情愛を経験した。それは地元の人が私たちを二人づつ家庭に呼んで歓待してくれたことだ。私も年少のK君と「およばれ」した家は増賀さんといい、たった一日だったけれども強い印象として残っている。

家庭の赤々としたいろりの火、そこに集う一家の親と子どもたち——家族と過ごした一日は、田舎の家庭の味のごちそうと共に忘れることができない。数日後また、その家のそばを通って子どもたちと顔を合わせたり、風呂屋でそこのおじさんに会ったりと、知り合いになった喜びが日記にも綴られている。